# Jeddah への道

小村幸二郎

**Wadi Madhar の夜**

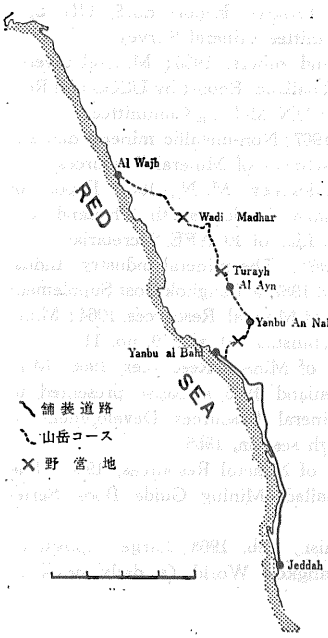
Yanbu al Bahr から調査地までおよそ 350 km 紅海沿いに北上してさんざん苦労した私たちは Jeddah への道を 山岳地帯に求めた(第91図). Al Wajh から Hijaz山脈に入り 山間部を通って Yanbu al Bahr へ出ようというわけだ. このコースは 紅海沿いのコースよりも車の往来が少なく 途中には大した村もないのでごく一部を除いては道らしい道がないばかりか ガソリンスタンドもなく ドライブには決して適当ではないが海抜 600 m前後の谷間を通るので 涼しいのが何よりの得策だ.

午前8時からおよそ2時間を費やして キャンプを完全に撤収した私ちは 廻り道にはなるが ひとまず Al Wajh へ出ることにした.

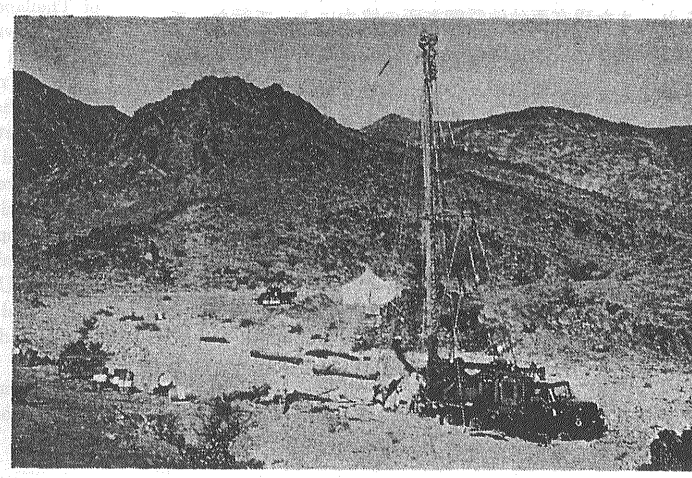
午前10時10分 Um Gurayat 鉱山跡のキャンプ地を後にして Wadi Hamalya を北へ曲ると キャンプ地は一瞬の中に 視界から消える. 再び訪ずれることもなかろうこの由緒あるキャンプ地は 私たちにとって 調査基地であっただけではなく 日々の辛さとわびしさとそして変転きわまりない自然のきびしさを通して この荒漠たる大地に強く生きる人々のたくましさと切なさとを 心でそして肌で教え わずらわしい人間社会を避けて あくまでも自然の意のままに生きようとするベドウインの真の姿を理解させてくれた所でもある. それだけに これが見納めかと思うと 岩肌を削る風の音さえひとしおわびしく感じられる.

キャンプ地からおよそ6kmはなれた Wadi Hamalya の一角には 希望に燃えて新しい人生を迎えた若い2人のテントも一族のテントも既になく 今頃は 草を求めてどこを旅しているのだろうか 漆黒の闇に花嫁が舞を演じた場所の傍に辛うじて生きながらえている灌木の枝には そこで生活を営んでいた人々が既に旅立ったことを示す一片の黒布が 強烈な光の中に わずかに揺れている. Wadi Hamalya から Wadi Zurayb 沿いに西へ曲る丘陵地帯の一角には ブラントンコンパスと巻尺とを用いて地形図を作成し これを用いて調査を行なったUm Huwaweetat Ash Shijna 鉱山がある. その露頭を右に見て 水井戸の試錐が行なわれている Wadi Zurayb (第92図) 沿いに西へ向かい Al Wajh に着く。今日もまた 紅海の碧さは目にしみるようだ. Al Wajh に到着してすぐナーセル殿下に挨拶した後 ガソリンや若干の食糧を購入し 11時30分 全車一斉に Hijaz 山脈の内ふところを目ざして出発した.

紅海の波打際からやや離れて崖を造る古い珊瑚礁 (第93図) に別れを告げ 灌木がまばらに生えた海岸平野を一気に通り抜けて 調査地の南端近くにある Abu Maru




第91図 Al Wajh から Jeddahへの道



第92図a 水井戸試錐が行なわれている Wadi Zurayb 後方の丘は玢岩からなる 地表からの深度7mで 飲料水として利用できる 割合いに良質の水に着いている

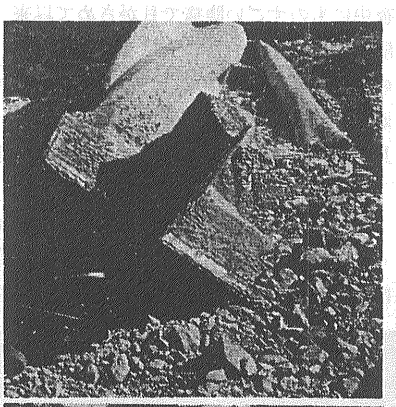
（石英の父）鉱山付近の花崗岩地帯を過ぎると　突然右手に広大な砂漠が広がる．　そして　この砂漠の一角に一きわ高く聳える花崗岩のモナドノック Jabal ar Raal（900m）が右前方視界から姿を消すと　道はいよいよ山岳地帯に入る（第94図）．　山容は急に嶮しくなり　先カンブリア紀層の変成度は東へゆくに従って次第に高くなっているのか　調査地域内に広く分布していた砂岩を主とする地層は次第に姿を消して　この付近から結晶片岩類が目立つようになる．　人影は全く見えず　車の轍をかすかに残すこの曲りくねった谷には　粉のような白砂が厚くたまっているかと思えば　大きな円礫がどこまでも続き　安らいだ気持で運転出来る部分は少ない．　車は容赦なく揺れ　場所によってはとぎすまされた刃物のような石が　まるで獲物を待ち受けているように　突出ているので　油断をするとタイヤは一瞬の中に切れてしまう．　全く気苦労の多いドライブではある．

Al Wajh を出発してからおよそ5時間の後に　Wadi Madhar の広場に到着した（第95図）．　目につく木は結構発育がよく　薪を入手するのが割合いに容易なため　このコースを旅する人々の野営地となっているのであろう　所々に焚火の跡が黒く残っている．　立木の成育状態やその密度やこの谷を埋めている土砂に見られる流水の跡は　明らかに　この付近が紅海沿岸地域よりも　雨量に恵まれていることを物語っている．　谷間の夜はやはり早くやってくる．　ここでも　運転手や人夫たちの間で　さらに前進するか泊るかで少々もめたが　200頭ばかりの羊を連れたベドウインがこの広場の片隅にテントを張っていることが分かり　羊を購入することが容易なため　結局はここで泊ることに落着いた．　この付近には点紋石英片岩や点紋緑色片岩を主とするみごとな結晶片岩類が露出して断崖を造っている．　私は　その美しさに魅せられながら　10年ばかり前に　四国の結晶片岩地帯を歩いた頃の想い出にふけった．

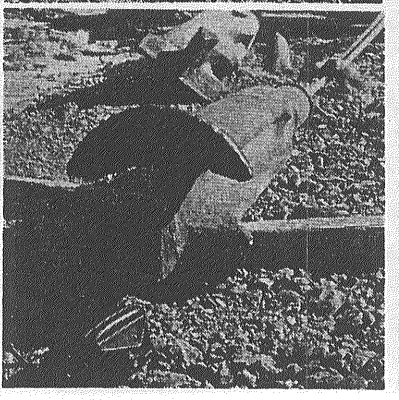
陽は山の端に沈み　肌寒いばかりの涼しさが急にしのび寄ってきた．　一片の雲もない空に輝やく月と星の光が　何と美くしく　突きささるように冷たいことか．人夫たちは　羊の肉に満足し　Jeddeh へ帰り着く日も近いとあって　赤々と燃える焚火を囲んで歌や踊りに興じているが　私は苦しさに喘いでいた．

この日でもう4日間　私は激しい下痢に悩まされつづけていたのだ．　下痢・食欲不振・暑さ・疲労そして睡眠不足で　この4日間は本当に生きた心地がしなかった．しかし　ゆっくり休養するだけの時間的ゆとりのない調査行ということもあって　身体の不調をひたかくしにして何とか頑張り続けているものの　常に不安がつきまとっていた．　日頃丈夫で病気らしい病気をしたことがないので薬を飲むことを知らない身体だけに　速効性の良薬を飲めば簡単に治りそうなものだが　日本を出発する前に医師のすいせんで買求めて持参した薬を飲んでも腹具合が良くなる気配は一向にない．

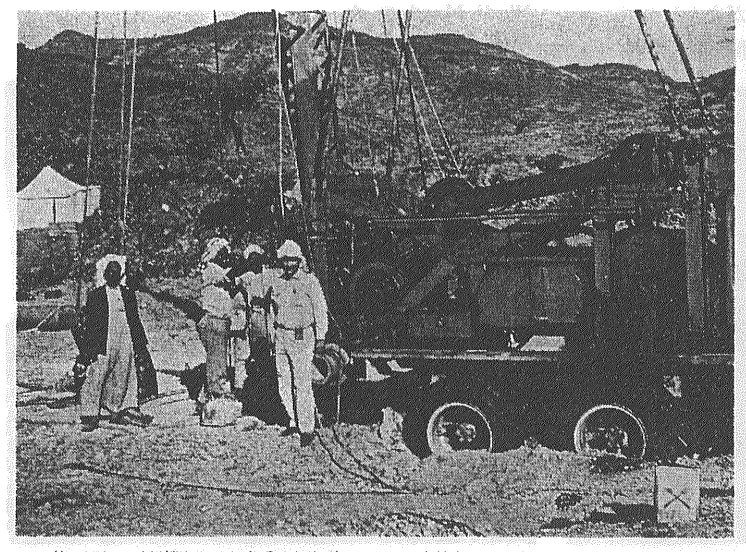
下痢の原因は5日前の夜飲んだ生水だ．　妙に喉がか



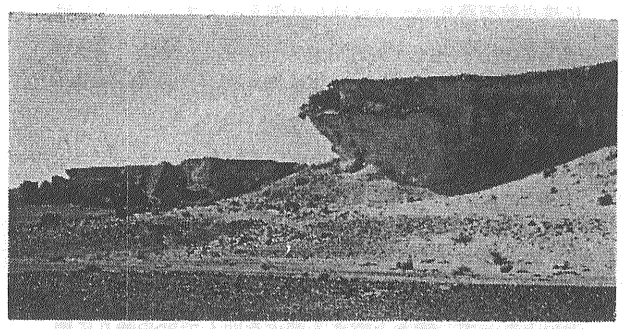
→
第92図 c
ビットの先端



第92図 d　ビットの先端



第92図 b　試錐機と　それを乗せた大型トラック　車輪をこの程度に埋めて　車の動揺を防いでいるだけで　2カ月余りの作業ができる



第93図　紅海沿岸地域にみられる古い珊瑚礁　このような珊瑚礁は　現在の海面からの高さ　30m前後で　この写真にみられるように急崖を造っていることが多い

わいたその夜　炊事場でお湯をわかして飲むつもりでテントを出た私は　炊事場の片隅ですでに寝入っているコックを起こすのも可哀相だと思って　湯をわかすのをあきらめ　身体に悪いとは知りながら　ドラム缶に入れた生水を飲んだ．　多少のゴミが入っていることを予想はしたが　真暗なだけにそれも見えない．　今日汲んできたばかりの水が一杯に入ったドラム缶にゴムホースを突込み　その先端を強く吸って水を引き　コップに受けた水を一気に飲みほした．　いつもの水と違って　その水は　なまぬるく　そして　妙に青臭くて変な味だった．日頃丈夫な身体だけに　甘く見たのがいけなかった．夜中にものすごい腹痛で目がさめて以来　下痢が続いた．闇を見つめながら夜の明けるのを待って　例のドラム缶の水を洗面器に受けて見て驚天　細かいゴミに混ってボーフラがうようよと泳いでいるではないか．　それを見た途端に胸がむかついた．　もう後の祭だ．

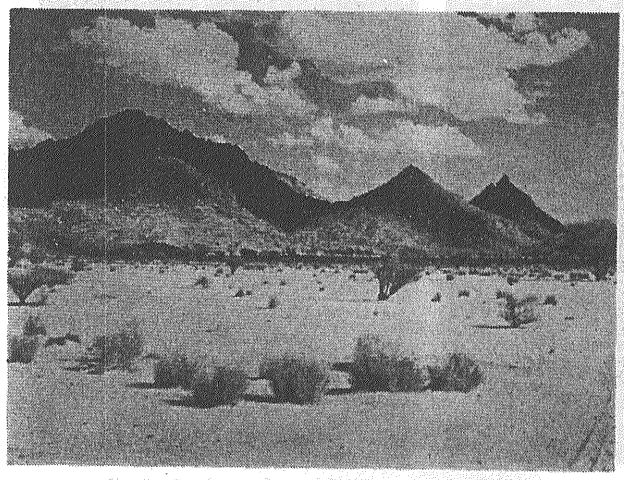
その後４日間　ふき出てくる油汗をぬぐうことさえ憶くうなけだるさと　しぼるような腹痛とをがまんしつづけていただけに　このキャンプ地へ着いて間もなく泊ると決った時にはほっとした．　しかし　その夜　私たちは　思いがけない大敵に襲われたのである．

星月夜の仮寝の宿は　山岳地帯特有のからっとした涼しさもあって　風情もあるが　夜露がひどくて身体にこたえる．　腹痛に喘いでいた私は　疲れ果てているはずなのに　焚火だけがわずかに人の存在を示す時刻になっても寝つけず冷えこみのつよい２時過ぎになってようやく眠りについたらしい．　ところが　夜明け頃　夢うつつの中に異様なかゆさを感じ　眠りからさめた．　見ると全身　ジンマシン様の発疹があり　真赤で妙にほてる．そのうちに　同僚たちも　次々にベッドから抜け出しては　一人残らず　かゆいかゆいの連発だ．　昨夜は　蚊もいなかったし　毛布をすっぽりとかぶり　蚊帳を完全に張っていたので　仮りに蚊や毒蛾などが居たとしても全身を刺されるわけがないし　ジンマシンでもない．

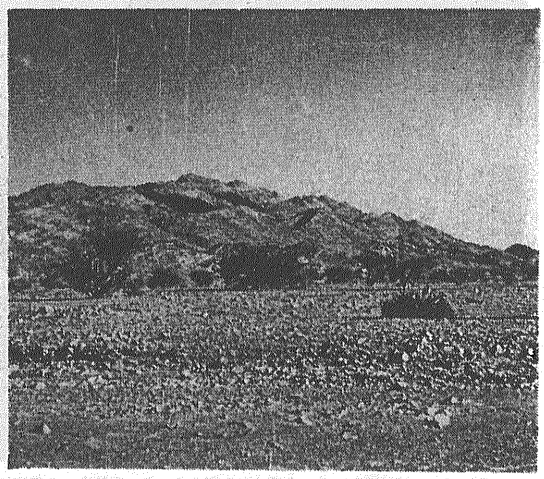
何に刺されたのかは未だに分らないが　このかゆさはその後２週間も続き　発疹の一部が化膿した同僚さえ居た．　Jabal Samran でキャンプした夜　真暗闇の中で首にイナゴ大の昆虫が突然止った．　全く不意のことなので　一瞬　ぎくりとして慌ててそれを払いのけたが後の祭り　ものの５分もたった時には　昆虫が止った首には大きなミミズバレが数本出来ていた．　ものすごく痛かゆいこのミミズバレにも閉口したが　全身がカユくなるこのような経験ははじめてだ．　しかし　それまで私を苦しめ続けていた激しい下痢は　この朝を迎えてピタリと止まり　腹の虫は朝食を待ちこがれていた．あーら不思議　これも神のおかげか．　アラー・アクバル（神は偉大なり）

**Wadi Mard の 水**

午前７時には全員が　身体をボリボリかきながら　べ



第94図　Abu Maru 鉱山の南方約15km 付近の地形　この付近から Hijaz 山脈の中核へ入っていく



第95図　Wadi Madhar　Hijaz 山脈の奥まった地域なので降雨量が多いのだろう　かなり大きな木が育っている　後方の山は点紋緑色片岩　点紋赤鉄石英片岩からなる

ッドを抜け出し　朝食をとって　9時に出発した．

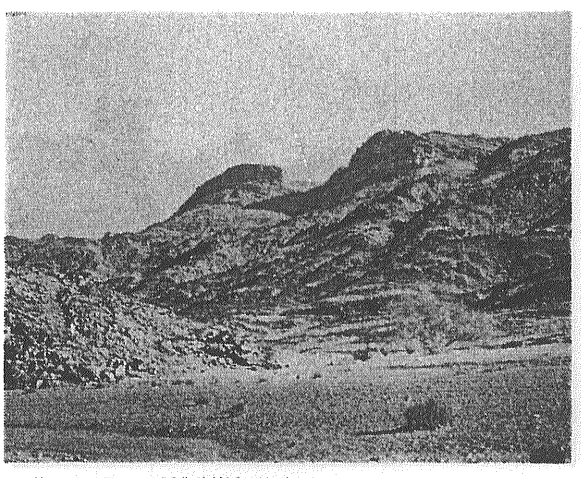
出発後およそ1時間　26km　ばかり走って　ベドウインの墓が20ばかり並んでいる小高い丘で小休止する．時速26km　近代科学の創造物も自然の荒業には十分の力を発揮することがむずかしく　その速度は将に牛歩並みだ．　この付近の谷は狭く　両側にそそり立つ結晶片岩類の山は急峻である．　一きわとびぬけて断崖を作っているのは石英片岩だ(第96図)．　冬季には雨量がやや多いのだろう　谷間には灌木や草が結構茂り　野鹿の群が身軽に跳んでゆく姿もみえる．

10時30分に出発する．　相変らず谷底を走るので　道は悪く　車は激しく身をゆすりながら南へ向かう．　エンジンの響は山々にこだまして　まるで断末魔に喘ぐ野獣のうなり声のようだ．　11時30分に Wadi Hamd に出た．　ふだんは水の流れを見ることもほとんどないこの谷には2日前に上流で降った大雨を集めて　濁流が渦を巻いていた(第97図)．　この国へきてはじめて見た水の流れは砂や泥を含んで　褐色だ．　とても飲める代物ではないが　人夫や運転手たちにとってもこの流れは珍しいのだろう　彼等は　頭にかぶった布（ゴトラ）を広げて一応ゴミをこしては　その水を飲み　かつ　ほこりにまみれた身体を洗うのに懸命だ．

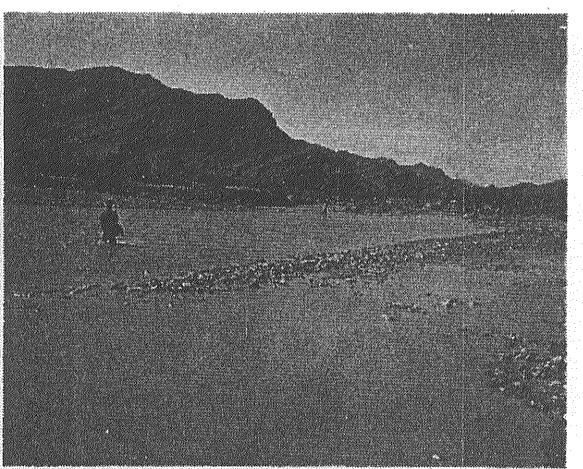
国の繁栄をそして生活のうるおいを水の乏しさで大きく妨げられている彼等にとっては　この濁りきった水もまた　悪臭さえ放つ水も　貴重な宝だ．　喜々として濁流にたわむれる彼等の姿を見ているうちに　私は胸苦しさを覚えた．　幅25mばかりの川の中央部の流れは急で立っているのが精一杯だし　深い所は1m以上もある．おまけに　車を停めている川岸は高さ2mばかりの崖となっている．　しかし　どうしても渡らなければならない．　ここから引返して紅海に沿って南下するとなると少なくとも2日は遅れる．　前進か後退かでまた論争かと思ったのも束の間　「前進あるのみ」ということで呆気なく衆議一決した．　そうなると勝負は早い．　全車を少し後退させた後　川へ入って通りやすい浅い場所を探す連中を除いて　全員がスコップや木片を手にして崖を削りにかかった．　そしておよそ40分の後には　大型トラックが楽に通れる坂道ができ上った．

いよいよ出発だ．　紅海の難所を越えた時と同様にここでも　先発は前輪駆動のきく中型トラックを運転するアブラヒムだ．　うまい．　運転台まで水につかる車を巧みに操縦して　アブラヒムは一気に渡り切った．次はジープの番だ．　この運転手は　川の中央部の深みで水が入ったために急におびえたのか　一時エンストしたが　それでも無事に渡った．　しかし　背の低いジープの後部に積んであったマットレスや毛布の半数はずぶぬれになってしまった．　ジープもトラックも次々に渡り　最後は大型トラックだ．　片言の英語を話し　背が高いので私たちからロングと呼ばれていたこのトラックの運転手は　Um Gurayat 鉱山のキャンプに着いた日の夕方　仲間とふざけていて足にカスリ傷を負った時　ふき出る血を見て　大きな図体に似合わず真青な顔でわなわなとふるえたものだが　ここでもやはり水におびえて大失敗をやらかした．　仲間が　渡りやすい場所をていねいに指示し　車を誘導してくれたにもかかわらず　坂道を降りた途端にハンドルを逆に切って　深さ1mばかりの泥の中へ車を突込んでしまった(第98図)．

さあたいへんだ．　深みにはまって「ガタン」と車が停った瞬間　仲間がワーッと馳け寄って　悪口雑言を鉄砲玉のように運転手に浴びせかけた．　運転手は　自分が演じた失態だけに　反抗することもならず　そして



第96図　Hijaz 山脈背稜付近の地形
硬い石英片岩（上方にとび出している部分）が一種のケスタ地形を造っている　左下隅に帯状にみえる部分は　新しい川の流れを示している



第97図　Wadi Mard
上流で大雨が降ると突然このような川ができるが　この水も数日中には完全に消えて元の Wadi（涸谷）に戻る　後方の山は典型的な結晶片岩からなる

皆で何とかしなければならないことが分かり切っているだけに　「沈黙は金」の格言を忠実に守るだけだ．

それから2時間余り　全員泥水をかぶりながら　土砂をはね　石や木を入れ　ウインチで引張り　押して　ようやく故障なくこの車を渡すことができた．

私たちも連中も疲れ　そして　完全に空っぽになった腹をかかえて　全車無事に渡り切った時には　安堵感もあって　いささかグロッキーになっていた．　しかしぐずぐずしてはいられない．　予期せぬ時間を費やした私たちは　ビスケットとお茶とで空腹を一応満たして次のキャンプ地へ出発することにした．

私たちが濁流を前に悪戦苦斗している時　ラクダを連れたベドウインがやってきた．　その多くは子供だ（第99図）．　流れのゆるやかなそして浅い場所を探していたこのベドウインは　やがて　親ラクダをまず1頭渡そうとしたが　砂漠に生まれ　砂漠に果てる運命に生きるラクダは　水になじみがうすいせいか　おびえて先へ進もうとはしない(第100図)．

手にした小枝で尻を叩こうが　全身の力をこめて手綱を引張ろうが　四肢をつっぱって頑として動こうとしないラクダと何としてでも渡そうとするその男との間に意地の張合いがはじまった．　まわりに多勢の人がいるのを強く意識しているのであろう　メンツを何よりも重んじるアラビア人らしく　強引なその男に反抗して救を求めるように泣くラクダの姿は哀れである．

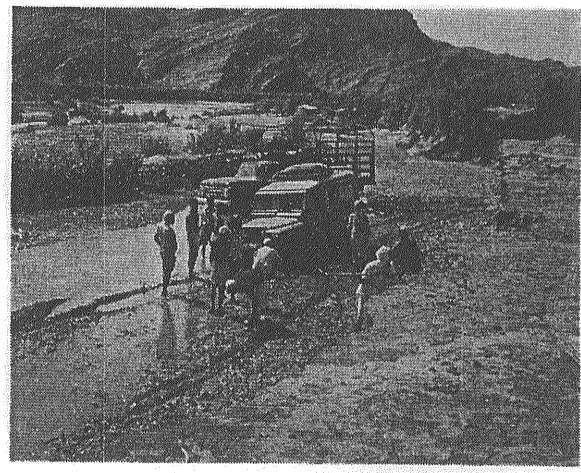
しかし　その争は呆気なく終った．　ラクダが前脚を折って水辺に坐りこんでしまったのだ．

砂漠の民ベドウインになくてはならぬ大事なラクダに対する愛情と冷静さとをこのベドウインに失なわせたものは一体何だろうか．　もし私たちがその場に居合わせなかったとしたら　彼は　水にひるむラクダの手綱をやさしく引いて　より上流へ向かい　そして　より安全な場所を見出して　無事にラクダと共にこの川を渡って行ったにちがいない．　責められ　脚を折り　濁流を目前にして動けなくなったラクダの泣声は　まわりにそそり立つ山々にこだまして　私たちの胸をえぐった．　痛さに耐えかねてか　その場に見捨てられることへの悲しみかそれとも再び子供たちと相見えることのない永遠の別れの辛さか　忿懣と悔悟に満ちた表情でその場を去って行く飼主の後を追うラクダの視線がひとしお哀れである．

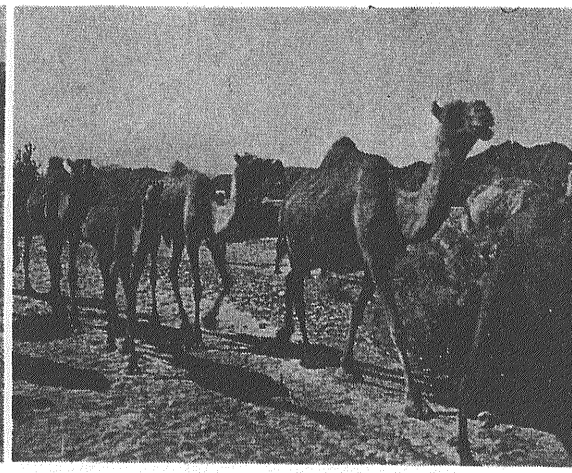
傷ついたこのラクダは時を経ずして死に果てることだろう．　水に飢えた人々の心を驚喜させたうたかたの濁流を目前にして　去り行く子供たちの後ろ姿を悲しく見送りながら　このラクダは死への道をたどる．　砂漠は自然は何故にこうまで非情なのか．

泣き伏すラクダを自分と置き換えて　その哀れな姿を見ている中に　私の胸の中には激しい憤りがこみ上げてきた．　しかし　その憤りをどうしたらよいのか　私にはどうする術もない．　もしもこれ位に非情でなければ砂漠で生き抜いてゆけないとしたら　少なくとも私には砂漠の民としての資格はなさそうだ．

4時10分　びっしょりに濡れた毛布やマットレスも大ぶ乾いたので　手早くジープに積み込み　Wadi Mard を後にする．　それからおよそ30分後　曲りくねった狭い谷を通る頃　ポツリポツリと大粒の雨が降り出した．この雨で濡れた車のフロントガラスには砂塵がべったりとついて　間もなく　見通しがきかなくなった．　ワイパーを動かそうとしたが全く動かない．　もっとも　一年中雨らしい雨が降らない所だから　ワイパーを必要とすることも稀なのだろう．　5時30分に　Wadi Tulayh に着いた．　今夜の野営地だ（第101図）



第98図　深みにはまって立往生したトラックと救出用のジープ（ランドローバー）　人夫たち　手前の轍の部分が安全コースであるが　このトラックは右側から　川へ降りたとたんに安全コースをはずして右の深みへつつこんでしまった



第99図　Wadi Mard へやってきたラクダの群

**Tulayh での夢想**

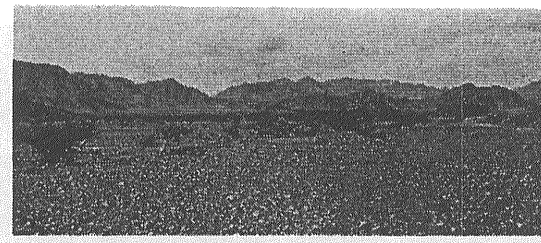
小砂利を敷きつめたようなこの広場付近には小高い丘がうねり　遠く西の彼方には　Hijaz 山脈の峻嶮がまるで墨絵のように浮んでいる．　野宿する度に悩まされる蚊も蠅も見えず　キャンプには絶好の場所である．

野営の準備の一時　私は　久しぶりにジープのハンドルをとって　丘のまわりを走った．　特有のほこりもたたず　雨上りの故だろう　谷の一部には草の新芽が出て茶褐色の風景にいろどりを添えていた．

ここに到着してすぐ　私たちは　同行の連中の昼間の労苦をねぎらって　羊を1頭ふんぱつした．　ところが食事の仕度をはじめる頃になって　すぐ近くではげしい口喧嘩が起こった．　肉の分配では毎度口論が起こるだけにそれ程気にもならないが　今夜の口論には少々興味がもたれる．　人夫や運転手たちの間での分配はうまくいったのだが　私たちの食事の世話をするコックと肉片を持ってきた通訳との間に口論がはじまったのだ．　コック用に分配された肉が脂の多いあまりうまくないところだったので　それを見たとたんに　コックが息まいた．通訳は　へらへら笑いながら　「お前の分は　確かに脂身が多いけれども　量が多いからいいじゃないか」と云って渡そうとするのだが　コックは　相手が笑えば笑うほど怒りがつのるのか　遂に　「こんな肉なんか要らない」と　タンカを切ってしまった．

通訳は　コックのこのことばを待ちかねていたように「そうか　要らなければやらないよ」といって　笑いながら　さっさと自分たちの溜り場へ引揚げてしまった．「短気は損気」とはまったく的を得た諺だ．

日頃バカにされているこのコックの怒りはもっともだが　人夫たちは　こうなることを十分に計算し予想した上で　最低の肉をコックに分配したのかもしれない



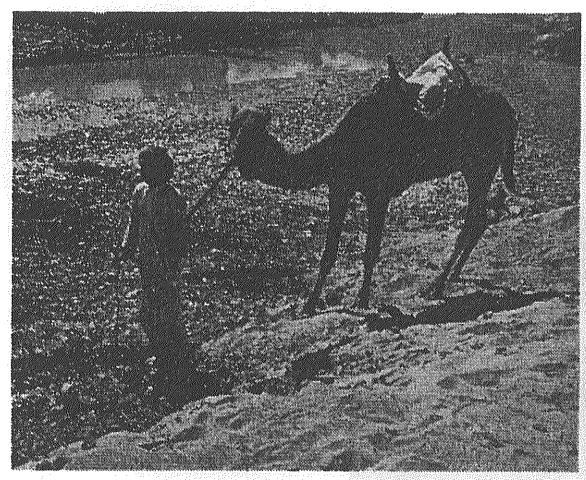
第101図a　Wadi Tulayh
手前の広々とした部分は旧河床　前方に見える黒い部分は結晶片岩の谷を埋めた第四紀の玄武岩溶岩流

全く呆れた連中だ．　結局　私たちの口に入るべき最上の肉の一部はこのコックと助手との口に入った．　それもコックのご気嫌をとりなだめすかして食べて戴いたわけだから　一番損をしたのは私たちだ．　私たちは誰と口論すればいいのだろう？　アラビア人の商魂のたくましさを如実に示した一幕はようやく終わった．　ここから Jeddah までは約520km だ．　夜更けにたどり着くつもりで頑張れば　Yanbu al Bahr から　Jeddah　までは完全補装道路なので　一日行程である．　人夫たちは明日は Jeddah へ帰り着けるという楽しみに浮かれて夜遅くまで語り合っている．

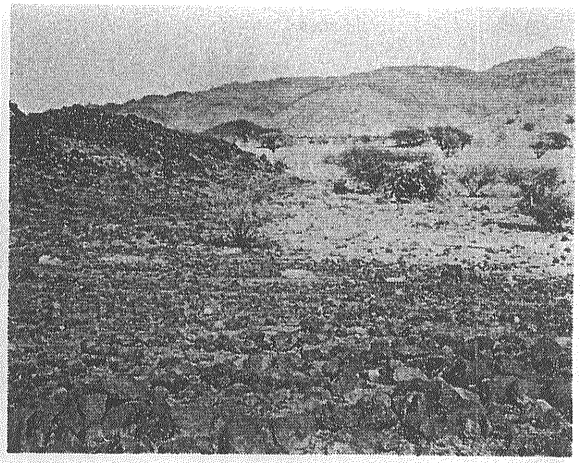
早朝の冷気が気持よく　しつとりと夜露に濡れた Tulayh は　まるで死の世界のように　静まりかえっている．

午前6時に目をさました私は　すっかり身仕度を済ませて　そーっと散歩に出た．　全たく静かだ．　小砂利を踏む度にザックザックと聞こえる自分の足音だけが妙に耳をつく．　澄み切った朝の冷い空気を胸一杯に吸いながら　私は 200 mばかり離れた野営地を見下ろす小高い丘の頂に登った．　寝ている人たちが多いのだろう野営地には2　3の人影が動いているだけだ．

丘の頂には 30cm 四方大の平べったい石があった．



第100図　水におびえて川へ入ろうとしない親ラクダ　この写真を撮影して間もなく前脚を骨折して　坐り込んでしまった



第101図b　Wadi Tulayh
第101図aの玄武岩溶岩の末端部(ゴロゴロしている部分)
玄武岩は非常に多孔質である

第103図
Yanbu An Nakhal の風景　多くの家は泥造りである

靴先でその石を裏返しにして　サソリや毒蛇がいないことを確かめ　やおら腰をおろそうとした時　アラビア文字が刻みこまれた花崗岩礫が目に入った．　その石に何となく興味を覚えは私は　付近を歩き廻つて　1字か2字刻みこまれたそのような石を大小5個見つけた．　まるで判じもののようなその文字が　何時頃　何のために刻まれたのかは私には分からない．

刻みこまれた文字をどのように組合わせてみてもことばにはならないし　これまでに見たことのない記号さえ刻まれているのを見ると何となく曰くありげだ．

拾い集めた石をじーっと見つめる私の脳裏には　すでに現実の焼けただれた岩肌の映像も砂漠の映像もなく遠い昔　異性を恋いそして楽しく語らうことの許されないきびしい因習に耐えかねた若者2人が　他人の目を避けて　自分たちにだけ通ずる文字と記号を組み合わせた誓のことばを　秘かに小石に刻み　再びここで逢う日を約して長い旅路をたどる幻想が一杯に広がっていつた．そして私は　この石のことを　自分の胸に秘めておくことにした．　何ら変り映えのしない石に刻みこまれた文字を通じて連想が連想を招き　私は　この広漠たる大自然の中で　若者たちの激情と沈黙との激しくも美くしい青春譜が妙なるメロデイをかなでる夢幻の世界へ没入していつた．

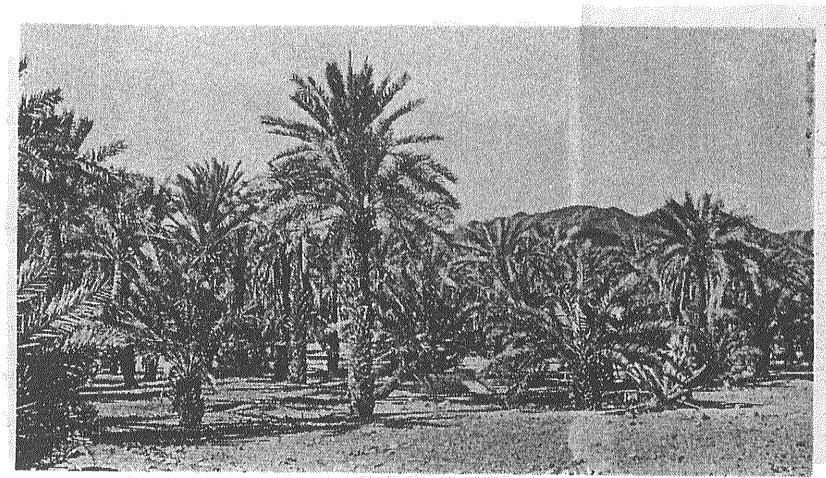
しかし　私の夢の中で相思相愛の若者2人によつて演じられたメロドラマに続きはない．　そして　茶褐色に塗りつぶされたこの荒漠なる大地に起き伏す私の姿がない限り　彼等の行末は永遠の謎だ．

静寂を破るけたたましいエンジンの響が　突然に　私を現実の世界に引き戻した．　皆起きたらしい．

**Yanbu An Nakhal の砂漠**

今日の朝食はいつもより簡素だ．　カチンカチンに乾き切ったパンにバターをつけてかじり　コーヒーを飲んで　朝食は呆気なく終った．　ここから谷沿いに70 kmばかり北へ進むと　第1次世界大戦当時に破壊されて以来放棄されている　ヘジヤーズ鉄道へ出る．　一目見たい欲望に馳られたが　先を急ぐので　遂に断念した．

7時40分　Tulayh を一斉に出発する．　目まぐるしく曲りくねる谷には　高さ3mばかりの木が青々と茂り鳩に似た美くしい鳥が数10羽の群をなして小枝にたわむれている．　この鳥は　割合いに肉付きがよく　散弾の的になりやすいので　ガイドにとっては絶好の獲物だ．ジープが突然停まり　隻眼のガイドのメイーズが車から飛び降りた．　足音を忍ばせて鳥の群に近づいたメイー



第102図
Al Ayn のナツメヤシの林

ズの銃が　鳥の群へ向かって　火を吹いた．　鉛の小さな粒は無数の小枝に阻まれて　2羽を射止めただけだ．でも　1発160円の弾丸で2羽を手中にしたのだからがまんせずばなるまい．

Tulayh を出発してから3時間の後 Al Ayn のオアシスに着いた（第102図）．　盆地状に拓けた山間のこの地には　数万本のナツメヤシの大木がうっそうと茂ってこの部落の豊かさを物語っている．　戸数50ぐらいだろうか　道路の両側に軒を連ねる家並の中には雑貨屋が2軒ある．　砂糖・紅茶・布類・野菜・菓子など　日用品類はすべてこの店で手に入りそうだ．　ヤシの葉蔭で15分ばかり休憩した後出発する．　ここから先はYanbu An Nakhal　まで部落は見当らず　金・銀・銅などの鉱脈型鉱床が点在する．　しかし　これらの鉱床を見る時間的ゆとりはない．

午後2時30分　Yanbu al Bahr の東方64kmの Yanbu An Nakhal に着いた．　ナツメヤシが広く茂るこの村の家は多くが泥造りだ（第103図）．　崩れ落ちた塀や無人の家が　この村の古い伝統を物語っている半面　より新しいものへの移行を現わしている．　立並ぶ家並の一角にポツンポツンと一きわ目立つブロック造りやコンクリート造りの家は　より豊かな　そして　より早く近代化の波を受入れた人々の住居の象徴なのだろう．

村はずれの井戸のほとりで一寸一休のつもりで車を停めたが　後続の大型トラックとジープとが姿を見せる気配がない．　大型トラックのことだし　途中に砂地もあったので　手間どっているのだろうと安心していたが　1時間待っても現われず　いささか不安になつた．　それから間もなく　ジープを1台出発させようとした時　砂ぼこりを上げてくるトラックが目に入り　残るジープ共に無事に到着した．　聞けばトラックとジープが故障し　修理のために遅れたのだという．　ここで　先に着いて　迎へに行こうとしていた通訳とこのトラックの運転手との間に　いつ果てるともしれない　つかみかからんばかりの大口論がはじまった．

それからおよそ30分の後　シャベリ疲れ　喉が乾いたのか　2人の毒舌も次第ににぶり　仲裁者が入ったのを機に　激しい口論もようやく幕を閉じた．　こうしたロゲンカの結末はいつでも同じだ．　メンツを重んじて一歩も退ろうとしない彼等には　本来ならば　ケンカの終末はやってこない．　だから　いかに激しく対立してもある程度時間がたてば　彼等は　必ず　仲裁者の出現を待つようになる．　そしてケリがつくと　今まで憎み合っていたことがまるで嘘のように　互に手をとり　キスをして　にこにこ笑っている．　こんなことなら　互にすごみ合って　ケンカをしなければいいと思うんだがそうもいかないのだろう．　全く不思儀だ．

このオアシスには　珍しく　カナート（人工の地下水路）があり　井戸（第104図a）から10段ばかりの石段を下りた所を流れる水路には　清水が豊かに流れ　ウグィによく似た小魚が10匹ばかり気持よさそうに泳いでいた（第104図b）　掘抜井戸ではみられないが　カナートの所々に掘られたこのような井戸や流水のある泉には必ず　小魚がみられる．　一見　誰かが飼っているのだろうと思われがちだが　上流に毒物を投げこまれた場合には下流の魚は毒死するので　実は　こうした魚は　その水を利用する人畜の生死の鍵となっているのだ．　これも生活の智恵の一つの表われであろう．　この清水で渇をいやし　休息した後　出発することになった．　日没までにはまだ1時間半はある．　頑張れば Yanbu al Bahr　には明るい中に着けるし　それから Jeddah ま

第104図a　カナートの所々にみられる井戸　Yanbu An Nakhal
手前中央に下へ降りる石段がある　遠景の山は金銀銅鉱床地帯

第104図b　104図aの井戸の下底部
右から左へ清水が流れている　地下水路を流れてはいるが上方が砂や　小砂利であり　気温が高いので水はなまぬるい

では補装道路を一走りだ．　喜しさをかくしきれずにはしゃぐ人夫たちをもう一息だと励まして出発した．

ところが　ものの30分も走った頃　先頭を走っていた大型トラックが　砂漠（第105図）の真ん中で　車輪の半分を砂の中に突込んで　完全に立往生してしまった．

絶対絶命．　他の車を救出にやれば　今度は　その車が立往生することは目に見えている．　止むなく　他の車を迂回させて　深い砂に足をとられながら救出に向かう　長さ3mばかりの丸太を車輪にかませ　車体の下に身体を乗り出して砂を手で掻き出し　ものすごい砂塵をまともにかぶりながら　10cm　20cmと車を進めてゆく瞬間的に事故を起こしかねないこの作業に　疲れ果てた身で　必死に取組んでいる人夫たちの姿は美くしい．

6時15分　懸命の努力は終わった．　それまで喘ぎつずけていたトラックが漸やく自力で走り出すのを見て人夫たちは　砂漠の果にゆったりと沈む真紅の太陽の残照の中で　一人残らず　飛び跳ねて喜こんでいる．　そうした彼等の姿を見つめながら　私の目は次第にうるんでいった．　この現場から西へ3km の地点で　迂回した車を待ち　40分後に全車無事に集合したものの　これから Yanbu al Bahr までの間に横たわる砂漠を乗り切ることを思うと要心が先に立ち　この夜は　Yanbu An Nakhal から Yanbu al Bahr へ引かれている水道管の近くで野営することになった．

暗闇の中に遠く明滅する Yanbu al Bahr の町の灯を見ながらこの仮寝の宿は　人夫や運転手たちにとってさぞ耐え難いものであったろう．　彼等と顔を合わせる度に「ムタアツセフ(悪いなあ)」というと　「マーリッシュ(気にしないで下さい)」と笑すらたたえて明るく答える．　これまで長い間　重なる悪条件の中で　苦労を分ち合ってきた仲間だけに　互いの胸に通ずるものは固い．

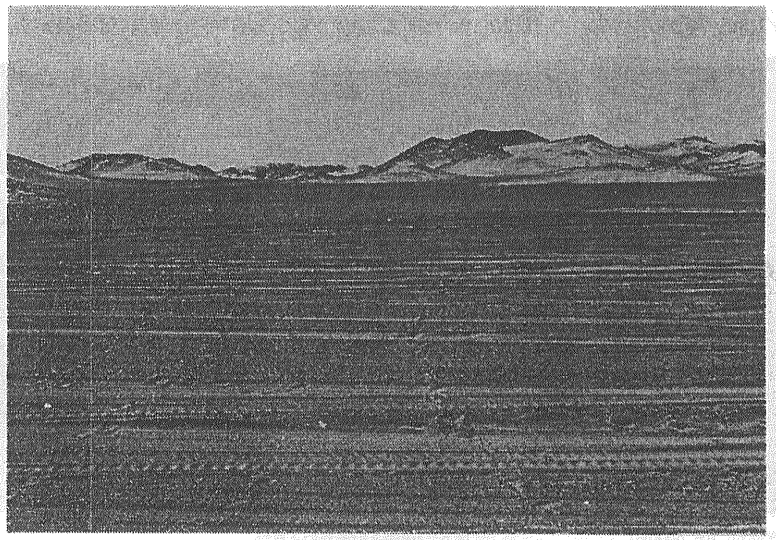
陽は沈み　夜のとばりが　すっぽりと　砂漠を包んだ．海岸に近い故か　水道管の汲取口の水は生ぬるく　私たちも彼等も　久しぶりに　汚れきった身体をこの水で洗った．　遮ぎる物一つない広い砂漠の一角で茶を汲み交し赤々と燃ゆる焚火に照らし出された彼等の顔にはもはや疲れはみられない．　昼間の喧騒もそして車の救出作業も今は遠い過去の出来事のように忘れ去られ　Jeddah へ帰る明日を楽しみに語り合う人々の和やかな話し声だけが広い闇の中へ消えてゆく．　美わしい夜だ．　調査行も　さまざまな想い出を秘めて　ようやく終末を迎えようとしている．　砂漠をかすかに鳴らして吹き渡る西風が野宿する身をいたわるように　やさしくなでてゆく．夜はとっぷりと更け　遠くに明滅していた　Yanbu al Bahr の灯が一つまた一つ消えてゆく．　人夫達の話し声もようやく杜絶えたようだ．

**Jeddah へ**

6時30分起床．　陽はすでに昇り　砂漠の真只中に並ぶ携帯ベッドには　輝やく光の波がさんさんと降りそそいでいた．　そよ風になぶられながら心地良く眠ったせいか　疲れはまったくとれ　寝起きは爽快だ．　昨夜寝る前に　カヤの上に毛布をかぶせ　朝の太陽光線を避ける手だてをしたのが功を奏した．

7時に朝食．　まだ朝早いというのに　砂砂漠の真只中で直射光をまともに受けているせいか　朝食をとっているという実感がわかない．　朝食後は用を足す習慣を身につけている人も　人目を遮ぎる物がまったく見当らない場所だけに　今朝はそのお務めもお休みだ．

8時15分　全車一斉に出発し砂塵を巻いて一気にこの砂砂漠を渡りきって　8時40分に　Yanbu al Bahr に近い補装道路に出る．久しぶりに見るこの道路には　相変らず　車の影はみえない．　ここから先は車の旅も快適で　段丘の上をわずかに上り下りしながら車が程よく揺れるせいか　睡気をもよほすことが少なくない．　約70kmを50分で走り抜けて　Badr Hunayn に着く．　Jeddah へ269 km Al Madinah へ156kmのこの分岐点には　時間的に旅行者が少



第105図　Yanbu An Nakhal 近くの砂砂漠

ない頃なのか　茶店には客も見当らず　主人と小間使がのんびりと　水煙草をくゆらせている.

もう何度もこの茶店で休息している故か　素通りできない義理のようなものを感じて　今度も何となく立寄ってしまった.　後続車を待つに格好の場所ということもある.　例の如く　甘ったるい紅茶を飲みながら　後続車の到着を待つ内に　Jeddah と Al Madinah の間を走る定期バスが通った.　真赤な大型バスはドイツ製で　料金は1人当り800円　涼し気な水色と白色のツートンカラーのマイクロバスは日本製で　料金は1600円である.　425kmの遠距離を走ってこの料金は安い.　これは1ℓの価段が12円というガソリンの安さにもよるのだろう.

Badr Hunayn を出発すれば次の休息地は Rabigh だ.　一定間隔をおいて出発した車は　途中快調に走って　Rabigh の行きつけの茶店に順々に吸いこまれてゆく.　ちょうど昼食時とあって　かなり大きいこの茶店は結構賑わい　魚の唐揚にかかりっきりのコックさんは大繁盛だ.　例に洩れず　私たちは焼飯と魚とで昼食を済ませた.　いつもなら食後のんびりとお茶を飲み　昼寝をして時間をつぶす連中も　Jeddah を目前にしているせいか　今日は馬鹿に尻が軽い.

Jeddah まで160km　いよいよ最後の一走りだ.　Rabighを出発して間もなく　東の空が褐色に染まり　急に陽がかげった.　砂嵐だと思う間もなく　ものすごい強風にあおられた砂が　音を立てて　車体を叩き　視野を完全に遮ってしまった.　時速100kmはこうなると恐ろしい.　運転手のモハムードに　「道路からはずれて停車しろ」といっても「マーリッシュ」と返事するだけだ.　いくら車の往来が少ないとはいっても　対向車が絶対にないとはいいきれない.　もし対向車がこの砂嵐をついて走ってくるとすれば　お互いに盲同然だから正面衝突しかねないし　また　後続車が同じように走ってくる可能性もあり　危険この上ない.　そのうちに車は　道路を斜めに横断し　ゴツンとにぶい音を立てて道路を左へそれた.　運転手が慌ててハンドルを右へ切ったため　今度は　車は道路を右へそれて砂漠の中を走り出した.　道路からそれ　道路へ慌てて戻し　時には道路からそれたまま砂漠を走り　完全な千鳥足だ.　視野が全くきかないので無理はないと思ったが　衝突事故を想像すると身の毛がよだつ.　車が道路からそれる周期が次第に早くなった.

身体を乗り出して運転手を見ると　半ばハンドルにもたれかかり　目を閉じているではないか.　いくら砂嵐の中を走っているとは云え　どうも様子がおかしいと思った.　完全な居眠り運転だ.

遂に　車を停めて　砂嵐が終るのを待つことになった.　後続車の様子は全く分からない.

時間ばかりが容赦なく過ぎて溜息が出る頃になって　ようやく　砂嵐が静まりそうになった.　そして　運転手の「大丈夫」という気色ばんだ言葉を信用して出発したものの　それから10分もたたないうちに　再び視界は2～3mになった.　何が大丈夫だ.　運転手は相変らず居眠り運転をしているのか　車は　右へ行ったり左へ行ったり　まるで正面衝突を目論んでいるかのように走り続ける.　何度停車しろと云っても云うことをきかない運転手の態度に遂に私は業を煮やして　それからは居眠りを防ぐために　運転手の頭や肩をコズキ続けることにした.　何処を走っているのか皆目分からない.

突然　視界が開け　紅海の碧い入江が右手に　目にしみるように　見えた.　海水浴場になっているアブホールダ.　風は相変らず強いけれども砂の厚いベールを抜け出したせいか　真黒の道路を這う砂が画く模様が　砂嵐の襲来をわずかに告げているにすぎない.

ここから Jeddah までは30km の至近距離だ.　運転手は Jeddah を目前にして目をさましたのか　車は　道路の右端を　快調に走ってゆく.　全く憎い奴だ.　午後4時に検門所を過ぎ　4時40分に私たちの事務所に無事に帰着した.　本当に辛いそして苦しいことに明け暮れた長い調査旅行だった.　真黒に陽焼けし　砂ぼこりにまみれた今にも泣き出しそうな顔々.　「ショックラン・マア・エル・サラーム（有難いございました　御気嫌様）」と告げて　夕闇迫る家路をたどる彼等が差出す手をしっかりと握りしめて　これまでの苦労にあらためて感謝するとともに　「偉大だった君たちの祖先の叡智と勇気と努力とを失なうことなく　力強く前進してくれ」と彼等に願う私だった.　彼等は　時を経ずして　苦労多いキャンプ生活を余儀なくされる奥地へ赴くことだろう.

いつまでもふり返りそして手を振りながら去って行く彼等の後ろ姿をじーっと見送りながら　苛酷なまでのきびしい自然条件にさいなまれながら営々と働く彼等の無事と　久方ぶりに逢う彼等の家族との別れて暮らす切なさを補ってなお余りある喜こびとを祈って　私はいつまでもたたずんでいた.

（筆者は鉱床部）